

# ‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

隔離状態における必然的事象の退屈しのぎの断片はカタカタと、走馬燈のようにメグリ・メグラ正気の沙汰と狂気の沙汰、ギリギリの境界でげんじつとげんかく、表裏一体の狭間でカタカタと下口口に切り替わる。白内障みみたいな眼をして、そろそろ強制的沈黙？あの子に時々声掛けてやってくれ。おあいにく様、アタシはマトモ。

ド口口は陽炎に、陽炎はヒト型になる。ヒト型の腹の底で、ド口口は流動する。血生真い口腔に気が入る。四本の奥歯グリ・グリグシャッて何か潰れた。一次元空白に斑点が飛び散った。湧いて出た回虫め、ヤツ等が喰い荒らした。速やかな駆除が望ましい。回路がイカレる前に散らせ。

トランキライザー抜きて過去最高の最悪逃避行。いい加減うんざり？  
顔面アスベスト約けの全身ジャリジャリ埃まるけ。バットコンディションで開き直り。ド力靴でいざや地下室。シラフじゃ立ってられない。体液のアルコール割り。ジャンキー御用運才腰け込み寺。両手から下げてタンマリ。ニンマリ目玉持て余している。

はじまる  
周りにつられて地べたに座り  
はじまる  
周りにつられて地べたに座っている

堪らず立ち上がる。そして何者かに向き合っていた。様々な感情が再生され、混乱をくり結末に至る。開け口のない思いと凄まじい憎悪とを抱えたまま。途方も無くでかい存在にひさます。羽目の弱小者。死床で押し潰れたまま。先走った頭で現実を拒み続け。真空中に引き離る表皮をウロコに鎖した鏡鏡な雌トカゲ。運いつくばるカノジョの眼前には。麻生し纏ける不死身の肉体がはつ。内側へ内側へと喰い込んでくる。外部をも便す毒性を撒き散らし裸体を晒している。

何が起ったんだ  
だらしない口をあけたオレ様  
立ち尽くしている有様  
あるけるか、あるこ  
あるかなきやゆき着かない、何処に？  
あるく、取り敢えず眠まで  
溜め込まれたモノが突き上げる  
潰れていた口が嚙ぎ始める  
(吐いて捨てろ、直ぐに)  
あるく  
すれ違ふ顔無人形たち、邪険な眼でカノジョを見やる  
あるく  
カノジョは脱け殻のように見えたが  
カノジョは殻を剥ぎ取られたのだった  
(一九九五・一・五 伝説)

これは「a.Dynasty」に小詩集「血反吐」を掲載してくれた手帳。Vさん(仮名)の作品です。



photo by k.k.



photo by k.k.

これは去年の2月2日2日について midnight press. 書いていたものです。

## 「狂乱」 恋 怪子

人間は言葉よりもずっと以前に音楽を獲得していたらう。人間を詩人にするものも存在は文字の獲得よりもずっと以前からあったらう。そして、叫びが歌であったらう。音楽も、詩も、歌も、人間の誕生とともに誕生したのである。

「狂乱」は、その原始の時代、音楽と詩と歌が人間と分かち難くあった時代、を現代に呼び覚ます。

エレクトリックなギターにエレクトリックなベース。そしてエレクトロニックなドラム。マシーン。柔静の音も歌の音もすべて機械処理し、そこに発生しているはずの生の音も肉声もすべてスピーカーから出る大音響で消し去られてしまう。そこでは静寂音さえ人工的に増幅されて聞こえる。「狂乱」はそんなエレクトリックな、エレクトロニックな現代に、原始の時代を呼び覚ます。

あるがままに (詩 ジュン)

たどれば自由 たどれば理想  
たどれば希望 たどれば夢  
ただそれだけを追う気があるか  
それ思っ方 その選択  
言葉が綺麗で中身が見えない  
私はいつでも自由になれるが  
死ぬ気はないので妥協が多い  
「生きていながら妥協のないこと」が  
私の夢、私の理想、私の希望  
心からそれを願う

現実逃避は素晴らしい  
それがそのまま逃げられるのなら  
それが出来ないのと分っている時  
俺は現実を我がものに  
あるがままに、あるがまま  
あるがまま生きてみて  
妥協を無くそうと

時には言葉に幾重にも纏い付いている腹衣を破り、言葉の本性を暴き出す暴力がある。「狂乱」はその暴力を、叫びが歌であるような歌と、エレクトリックな、エレクトロニックな演奏とでアンプリファイし、聴く者を暴力的に生きたばかりの人間の、無防備で無垢な状態に追いやる。

「狂乱」を聴くという事は、現代の詩人の誕生に立ち会うことである。すべての命だけが持つ独自性、すなわち唯一無比の存在、それらが感受され、ふるえる。人間を詩人にするものが感受され、ふるえる。

つい最近まで、私は「思想を語るのではなく、思想に生きることが大切だ」と考えていた。そして、その思想というのはほとんど書物とおし、つまり知識として知っていたものにはすぎなかった。この知識というのはジュンが「知識はあつていいと思いません。ジャマなのは概念でしょう」と語ってくれた(1994.12.28)ものではなく、ひでろうが眼鏡取楽舞で「知識でもって都合のいい結果を無理矢理に引き出す。無意の知識でそらす。知識で馬鹿をさらす」(「音に出来たら歩く」)と歌っているような、そういう知識だった。

それが、去年の1月に狂乱のライブに出会って、書物に書いてある思想を語るのも思想に生きるのもなく、その人の語ること(「歌」といっていいが)がすべて思想である、そういう人たちが、目の前にいることを知った。衝撃だった。そして、そういう人たちの語ることを記したいという思いが、狂乱の詩と、同じように狂乱に衝撃を受けた人たちの作品を中心にしたロック詩集「a.Dynasty」の出版になった。

去年の9月29日、2000Vでの狂乱のライブは強烈で、始まったときにドラムとベースの音が2000Vを埋めつくし、破壊的なギターがそれをかきまわし、はじめて狂乱を聞いた1月16日のときのように、すぐ目の前に歌詞がせまってきた。あの切り裂き方、真に構築する力、脳ミソがとびちるようだった。そして「糾追」には「父よあなたも時代にとられた。五十年の壁の固さは承知」ではじまる。「糾追」はいつも私を「ボサッとしてないで、とっとと生きろ」と追いつた。狂乱は私にとつていつも糾追だった。ライブばかりでなく、時にはジュンやひでろうが語ってくれたこともそうだった。

ひでろう:ジュンは俺がまだ頭ん中がゴチャゴチャになってたとき(高校をやめた頃)、もう捨てるものは全部捨ててた。  
ジュン:とつておいたらよかつたと思うものもある。  
私:それは何ですか?  
ジュン:先のことを考える力と、自分の状態(たとえば苦しんでゴチャゴチャになったとき)を解釈する力。(1994.4.12)2つとも私が捨てたい、捨てたいと思われ続けたいことだ。だからこれを聞いたときの衝撃! 先のことを考えて自分を狭め、自分を解釈することで自分を狭め、いつも「現在」をあいまいなものにしてきた。けれど、9月29日の「糾追」で、丸暗記しているようなことを多弁るのをやめて沈黙し、「現在」そこからあらわされてくるはずの生きたての言葉、生きたての思想をわがものにしたと切望するまじかになっていくことを実感した。はじめて狂乱を聞いたときとはほらかけ離れたところまで追いつたてられてきた。「壁の固さ」がぶちこわされ、ずいぶん身軽になった。

ロック詩集  
1994 AUTUMN